

森造りに多様性を求めて

1 はじめに

信州信濃の地名はかつて「科野」と記され、シナノキが山野にたくさんあったことから、この国の名前になったともいわれます。かつては、この樹の内皮から繊維を採取し衣類やカゴなど生活に利用していました。「埴科」「仁科」「更級」といった県内の地名は、シナノキの皮をは剥いだ、煮た、晒したところと言われます。

また、山菜として人気が高いフキも今では茎のほろ苦さを楽しんでいますが、昔はこの葉でお尻をふいたことから名前がついたのでしょう。

かつての暮らしは、木材だけでなく、森林の様々なものに価値を求め森林の多様性の中で生活が成り立っていました。

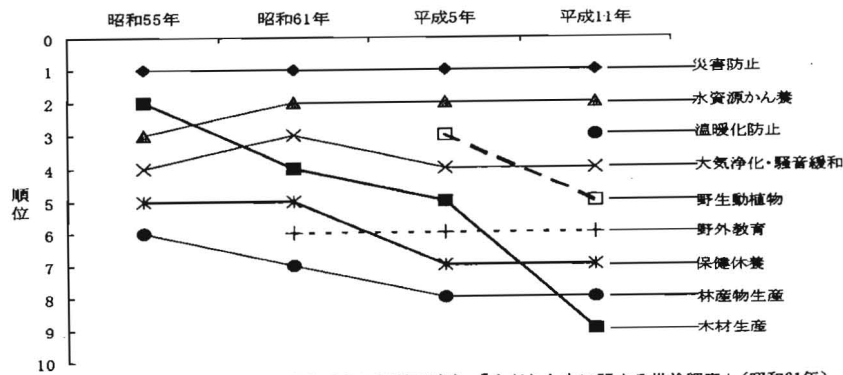


写真-1 シナノキ

2 国土緑化・生産性の追求から多様性へ

明治から昭和にかけて、里山は、薪炭林や緑肥の供給地として激しく利用され、さらに戦中戦後の伐採により日本の山野は荒廃しました。このような状態の中で、国土緑化植林が行われ、さらには木材資源の早期造成を目指して拡大造林が行われました。現在、針葉樹一斉造林の問題点も指摘されていますが、生産力をスギと広葉樹と比較すると約4倍の差（50年生1ha当り、スギ：500m³、広葉樹：120m³）があるので、資源の早期造成に針葉樹が利用されたのは当然でしょう。戦後50年間の人工林造成は、これまでの日本人の森林との係わりあいの中で極めて希な時期ともいえます。さらに今後は、地球温暖化防止などとも関連しながら、これまでに経験したことのない森林管理が必要となっています。

平成11年度の林業白書では、国民が森林の役割に何を期待するのか、昭和55年からの変化を載せています（図-1）。災害防止、水源のかん養はずっと上位にあります。木材生産は順位を下げました。また、温暖化防止や野生動物の住みか、野外教育などが新しく加わり、国民の森林への期待は変化し、多様になっています。



資料：総理府「森林・林業に関する世論調査」（昭和55年）、「みどりと木に関する世論調査」（昭和61年）、「森林とみどりに関する世論調査」（平成5年）、「森林と生活に関する世論調査」（平成11年）
 注：1 回答は、選択肢の中から3つを選ぶ複数回答であり、期待する割合の高いものから並べている。
 2 選択肢は、特になし、わからない、その他を除き記載している。

図-1 森林に期待する役割の変化

(出典：林野時報 2000年11月号)

3 見直されてきた広葉樹

広葉樹は、森林の公益的機能の高度発揮を求める声や広葉樹材の枯渇を反映して、近年、注目されています。

県内の造林面積は戦後のピーク（昭和 28 年）の 4% にまで減少している中で、広葉樹の造林面積は全樹種の 2 割を占めるまでになりました。10 年前は 1% なので広葉樹の人気の向上が伺えます。

当センターでも広葉樹造林造成の研究に取り組み手引き書により現場への成果の普及に努めてきました。

しかし、広葉樹はその種類が多く、多様な性質で未解明な部分が多いため、一部を除いては広葉樹造林が手探りで行われている状況です。スギなどの針葉樹造林が江戸時代以来 400 年の歴史に対して広葉樹造林は始まったばかりなのです。（戦前にも広葉樹造林が行われていましたが、戦後中断してしまいました。）

県内には立派に成林した広葉樹造林地が所どころで見られます。明科町の旧鉄道防備林のケヤキ林は約 45 年生で、平均胸高直径 22 cm、樹高 23 m の立派な森林になっています。しかし、構内で平成 11 年におよそ 70 cm のブナ、トチ、カツラを混植したところ、トチ、カツラは 3 m ほどに成長していますが、ブナは本数を大きく減らし、残ったものでも 1.5 m ほどでした。広葉樹造林のすべてが成功しているわけではなく、県内の広葉樹植栽地では植えた苗が枯れて、目印の竹串だけが立っていることも少なくありません。むしろ、うまく育っていない所の方が多いのではないのでしょうか。



写真-2 植栽された広葉樹

しかし、森林に多様な機能を期待するためには、今後も多くの広葉樹林を増やしていかなければなりません。そこで、人工植栽だけに頼るのではなく、リスがドングリを運び、野鳥のフンや風に飛ばされた種から若葉が育つ、自然の力を生かした広葉樹の森造りはどうでしょうか。

ヒノキを植栽してもその中にはたくさんの種類の広葉樹が自然に侵入し成長をはじめます。今までの生産性を重視した林業では、それらの広葉樹はすべて下刈、除伐で排除する対象でした。しかし、森林の多様性を重視する林業では侵入した樹種のうち、有用なものを残して混交林に育てることが必要になります。

また、間伐で広葉樹は伐採されることが多いのですが、公益的機能を高めるだけでなく、ウダイカンバ、クリなど高価に取引される樹種はあわせて育てるべきです。そして、適正な間伐を繰り返すことにより、林床を明るく保ち、自然に侵入した広葉樹を育てることも必要です。



写真-3 間伐により林床が豊かになったヒノキ林

4 おわりに

リスが行う山造りと書きましたが、これは「ほっとけ造林」を意味するものではありません。人手を加え自然を上手に誘導することにより多様性に満ちた山造りが行えるものと思います。

森林造りに手がまわらない状況が続いていますが、森林の役割は木材の生産だけに限りません。多方面にわたる森林の機能が十分発揮できるような森林造りが求められています。

（指導部 松原）